

knowing me, knowing you 世界のアートの知の技法： オルタナティブなアートスクール／ラーニング・プログラムのリサーチ [杉田 敦編] レポート

2022年10月2日（日）13時30分～15時

会場 | ラーニングルーム オープンスペース

参加者 | 12名

「knowing me, knowing you 世界のアートの知の技法」第3回目は、美術批評家として活躍され、大学でも教鞭をとられている杉田敦さんをゲストに迎え、ラーニング・キュレーターの山本高之さんとの対談形式で実施しました。

杉田さんは、横浜市にあるオルタナティブスペース「blan Class」で2012年から2019年まで、オルタナティブ・スクールとして「nano school」を主宰し、根本的にアートについて学ぶプロジェクトを展開してきました。「意味のある美術教育をしたい」という杉田さんの思いは、自身がもともと理系分野で学んでいたことに起因しているそうです。

大学で物理を専攻し、素粒子について研究していた杉田さんには、正誤がないアートの世界はとても「自由」にみえていたと言います。しかし、紆余曲折を経て関わるようになったアートは、意外にも形骸化した硬さがあり、思ったような「自由」さがありませんでした。

日本の、とくに大学における現行の教育システムでは、「自由」な美術教育は無理があると杉田さんは言います。そもそも「授業料は高いし、資格がとれるわけでもない、就職もできない」美大において、その「放し飼いな」霧囲気の中で社会へ問いかける表現が生まれてきたと杉田さんは考えますが、現行のシステムの中では、就職先にどのようなところがあるのか、どんな授業をするのかといったような「合理的」「効率的」な部分が強調されるようになっており、美術教育をする、受けるということの根本的な部分が見えなくなっていると言います。

杉田さんは「マニフェスタ」(<https://manifesta.org/>)、2022年開催は「マニフェスタ14」)に出展されていた

作品から、教育をする、受けるということの根本的な重要性を体験しました。紛争により破壊された廃校を舞台にしたE TEA (<https://manifesta14.org/participant/etea/>)による、当時の生徒や教師、医師や政治家などへのインタビューからなるビデオ作品からは、教育を続けることの根本的な重大さが伝わってきたと言います。

教育への根本的な希求を考え直すとともに、問題となるのが現実に即した教育になっているかどうかです。美大ではペインティング（絵画）を専攻とする学科や、専攻している学生の割合が圧倒的に多いですが、国際展などの展覧会では、ペインティングの展示はあまりみられません。これは一例ですが、実際の社会におけるアートのありかたや、いまのアートがなすべきことといった本質的な部分に対してアプローチできる教育になっているかどうか、という点で美大での教育と、実際のアート現場との乖離がみられると言います。

では、本質的に、現実に即してアートを学べる美術教育と、美大での美術教育が乖離している問題はどのように解消することができるのでしょうか。日本でそのことに立ち向かったオルタナティブな活動の一つが「パーブルーム」でした。「パーブルーム」とは、美大や美術予備校での教育に疑問を抱いたアーティストの梅津庸一によって2013年に設立された、私塾「パーブルーム予備校」を拠点とする、アーティスト・コミュニティです。美術予備校が受験のための教育に特化してしまっていることや、美大での教育や制作活動にもその受験制度が大きな影響を及ぼしている点を逆にとり、予備校や教育自体を美術運動として展開させています。

イギリスでも同様に、実際の現場と教育の乖離への疑

問や不思議さなどに対する態度としてさまざまな試みがされています。山本さんは2017年、文化庁の在外研修制度を利用して1年間、イギリスのテート・モダンにおいて、美術館でおこなわれる教育活動のリサーチをしました。これまでの美術館での教育活動は作品や作家について伝える、学ぶといったことが中心であったことに対し、美術館で行われる教育は相互に学び合う「ラーニング」であり「作品を使った学び」であるというスタンスをとり、美術館における教育方針の大きな転換期でもありました。

「教育」と聞くと、知らなかったことを知る、分からないことが分かる、答えを得る、といったことが一般的にイメージされるでしょう。本レクチャー後の質疑でも「最近の学生・若者は分からないことに対して答えを得ようとしたがる」という意見もありました。現代アートも分からないとよく言われますが、他分野、たとえば物理学でも同じものだと杉田さんは言います。わからないからこそ、繰り返し失敗もしながら進めているのだと。しかし、形式やルールを壊したり、理論で全てを説明しないことはアートにしかできないと断言します。

杉田さんは「nano school」での活動などから、絶対にわからないものはある、という確信を持っています。ある時代特有の感覚や他者の感情の機微など、どうしても分かることができないものがあることを実感してきました。しかし、そうした「分からないもの」を持ち続けることが大事ではないかと杉田さんは言います。すべてを白黒に分けることができないように、すべてを分かることも不可能なことです。分からないことに手を伸ばしたり、分からないままに受け入れたりする手立てを示すのがアートであり、そこには自由さが必要だと言います。

「分からないこと」を持ち続けることへの抵抗感が学生に根強いのは、小中高の教育の影響も大きいでしょう。知識を教えられた通りに学んでいく教育から抜け出す場所が大学であるなら、今のシステムはその反対を進んでいると言えます。杉田さんが大学で教鞭をとりはじめた頃の学生に、サエボーグ (<https://saeborg.com/>、「あいちトリエンナーレ2019」参加作家) がいます。学生時代は既存の枠に囚われ、美術という枠を意識しすぎていたと言います。いま、作家として活躍している様子からは

全く想像できない姿ですが、そうした態度、既存の考えを変えるための実験の場として美大が成立すべきではないか、と杉田さんは言います。以前、山本さんが杉田さんの授業にゲストとして参加した時、大量のケンタッキーフライドチキンを持ってあらわれ、それをみんなで食べて、「これって本当に鶏なの?」と食べ終わった骨を組み合わせさせて鶏をつくる、ということがありました。学生たちはこれがアート?授業なの?といった感じだったと言いますが、問いかけをなげること、既存の概念を疑うことを示すのがアーティストの役割だと実感したそうです。

既存の枠をつくりあげる教育から脱却するための場として、美大が成立することができないならば、そのための場としてオルタナティブなアートスクールが存在することに、大きな意義を見出すことができます。加えて、そうした活動が常態化することが重要だと杉田さんは言います。美術教育の変革は、さまざまな場や立場で試みられるべきです。2006年の「マニフェスタ」は、オルタナティブ・スクールを集めたものになる予定でした。キャンセルされてしまいましたが、実現していればどのような活動をみることができたのか、非常に気になります。

絶対的なかたちを持たない、形骸化されたかたちを壊していく、問いを投げる、アートの本質とそれを体感し学ぶための場の必要性を感じました。

(レポート松村淳子)